の作に係る體高七一糎のものは、寺傳に定賢律師の像といふが、それは寶泉寺を諸岡寺の末流とする説に誤られたものであらう。

**ホウセンジババ　法船寺馬場**　↓サイガハババ　犀川馬場。

**ホウセンジマチ　法船寺町**　金澤の町名。名義は此の町内に法船寺があるより起り、明治四年四月戸籍編成の時寶船路町と改めた。舊傳に、昔は此の附近都べて犀川の河原であつたのを、寛永八年の火災後犀川橋爪にあつた法船寺にそこへ移轉を命ぜられ、初めて町家を見るに至つたといふ。

**ホウセンジマチクミチ　法船寺町組地**　金澤の町附足輕の組地であつた。町附足輕の濫觴は明らかでないが、組地の古圖に、『小頭澤田林太夫以下十人の居屋敷は慶安年中始而相渡り、法船寺町組屋敷与唱申候。』とあるから、この時に初つたのであらう。

**ホウセンボウ　寶泉坊**　金澤子來町に在つて、摩利支天山と號し、眞言宗に屬する。慶長六年この地を賜はり、十一年富田越後重政は摩利支天堂を建てたが、天保十四年四月一日自火によつて燒亡し、その後草堂の體になつた。

**ホウゾウイン　寶藏院**　岡本慶雲の末森記に、前田利家が後卷の爲津幡まで進んだ時、山伏に出陣の吉凶を占はしめられたが、利家の氣色を察して直にその時期を得たことを申上げたといふ物語がある。この山伏は清水八幡宮の社僧で、本山派の寶藏院であつた。寶藏院系譜に、『十二代寶藏院、永祿二年十一歳而住職。此代一揆兵亂、社頭寶物書籍等燒失、寺領不殘被押領、纔一宇ノ坊舍ニ住居ヘル處、天正十二年九月能州末森御後卷之時占被仰付、御感悅之餘、被得御勝利御歸陣後御褒美可賜之旨、御書御印被下之處、十月末より煩、十二月病死。』とある。

**ホウゾウジ　法藏寺**　鳳至郡輪島に在つて、淨土宗に屬し、寛永三年願譽貞存の創立である。

**ホウゾウジ　寶藏寺**　金澤山上町に在つて、眞宗東派に屬してゐた。寺記に、文祿元年祐念之を金澤中町に創建し、後河北郡森下に移り、正保三年再び現地に移轉したとある。安政二年十一月十六日東本願寺別院が出火燒亡したが、後に寶藏寺有法の誓念寺學習と共に放火したこと顯れ、翌三年下口の仕置場で磔刑に處せられ、寺院は破却せられた。

**ホウゾウジ　寶藏寺**　鳳至郡鵜川に在つて、眞宗東派に屬する。初め小垣村にゐたが、慶長八年今の所に轉じたといふ。能登名跡志に、『寶藏寺は大寺なり。昔は敎院にて、此谷内に在りし由。是に什寶あり。』と記する。

**ホウゾウジマチ　寶藏寺町**　金澤の町名。文政四年二月郡地の一部が町奉行裁許になつた時、卯辰村領山上下町は山下町、同寶藏寺より春日鳥居迄の内裏通りは寶藏寺町となつた。しかしこの名稱今は廢せられ、山上町に屬してゐる。

**ホウタイボウ　法臺坊**　白山中宮の衆徒の名である。源平盛衰記の涌泉寺鬪爭の條に、『八院三社の張本人に法臺』と見え、平家物語に『寶臺坊とて中宮の衆徒也。』又白山禪頂私記に『中宮法臺坊』と記したもの、皆是である。

**ホウダイボウ　寶代坊**　元祿年間金澤香林坊に借家して居た小松屋次郎兵衛といふ者、白山山麓尾添村に赴き、名を寶代坊澄隆と稱し、秦澄の龜鑑といふものを傳へると主張し、高野山に登つて白山護摩堂別當の稱號を許され、次いで檜新宮・加寶宮を造營する爲開張を行ふべき許可を幕府の寺社奉行に受け、佛體等を江戸に持出して世評に上つたが、たゞ一代の事で斷絶した。白山史に尾添村加寶宮のことを述べた次に、『祠旁有ニ寶臺坊遺址一。昔秦澄登ニ白山一居ニ綠池側一。持誦專注。忽九頭龍出ニ池上一。澄稽首禮足。菩薩告レ之以ニ神世之事一。而妙躰已隱。澄自記ニ薩之語一。與ニ之寶臺坊一。謂ニ之龜鑑一。今猶藏ニ彌四郎者家一。以爲ニ金簡玉札一。然讀レ之。其文鄙俚庸妄。其贋者不レ俟レ論也。』といふもの卽ち是である。龜鑑といふのは所謂秦澄鏡之卷のことであらう。

**ホウダツ　寶達**　羽咋郡押水中庄に屬する部落。往時は無高所であつたが、正德二年草高を百五十五石餘と定められた。能登名跡志に、『寶達村は西平(寶達山の)に在り。家數八十軒許り、町作りなる村也。中頃金を掘りし節、所々より來り集りし故、人々の出所を家名に呼ぶ家あり。中にも谷内屋とよぶ者は根元の者にて、今用ふる所の大釜は末森城の釜なりといへり。其外此者の家に武器の類取傳ふる也。』とある。

**ホウダツ　寶達**　羽咋郡寶達村から出た土工をいふ。金山の採掘裝へたる後、その坑夫等は加能越三國に出でゝ、堤防・用水路築造等の土工に從うたので、藩内の黑鍬業者は殆ど寶達村民なるかの如き觀を呈し、從うて此等の黑鍬を寶達と呼ぶに至つた。

**ホウダツガハ　寶達川**　羽咋郡寶達山の櫻ヶ谷・北谷に發し、米出に至つて海に注ぐ。故に一名を米出川ともいひ、流程一〇粁。その支流煤竹川は同山の煤竹谷より發し、本川の上流で落合ふ。寶達川は古來屢洪水の害があつた爲、寶曆十三年藩に請うて山崎から河口まで四粁の河床を作つたが、それでも砂礫次第に堆積して、今は平地よりも九米の高きにある所もある。

**ホウダツキンコウ　寶達金坑**　羽咋郡寶達山の金坑は、天正十二年に開かれたが、その後非常の盛況を呈し、鑛鋪凡べて十二ヶ所、諸國より集つて來た坑夫の家を構へる者八十戸に達した。金山の採掘權は初め親方と稱する者の掌中に在つて、慶長十七年には判金參拾七枚、十九年には五十五枚の運上を納めたが、元和三年三月之を加賀藩の有に收め、奉行を置いて監督せしめた。寛永五年鑛鋪崩壞し、多數の坑夫埋死するに至りて、一時この採掘は廢止されたが、七年にまた修理復興せられた。その頃より金坑經營は再び藩の手を離れた如く、元祿六年には金澤の町人泉屋傳左衛門の山師であつた記錄を存し、後明和元年にも運上金二枚一兩を納めて居た。故に當時も尙多少の產出があつたのであるが、漸次萎靡して全く廢せられるに至つた。

**ホウダツクヅコ　寶達葛粉**　羽咋郡寶達山產の葛根より製造したもので、古來有名であつた。寶達の金坑が廢絶して坑夫が其の業を失うた際、山中の葛根を掘り製造したことから濫觴するといふ。

**ホウダツゴゼンシャ　寶達御前社**　羽咋郡寶達山の頂に鎭座し、邑民はもと千速五社權現と稱した。蓋し山麓東間村の手速比咩神社